

●高澤良一 第十句集 素抱

●七月―九月

駒草を困ふ鎖の霧雫

苦瓜料理出され箸つけみしものの

冬瓜汁すすまぬ箸を奨められ

桔梗蓄みて鞍馬天狗の被りもの

揚羽蝶雨後の路地より発ちゆけり

こんにち通行人わ上がりましたネ梅雨のあめ

母の記憶虹より淡くなる勿れ

草むしりして来て茗荷の出来云へり

ひとり酌むビールを余す夕べかな

金魚玉留守を任されゐたりけり

ドンガバチ悼名古屋章ヨの声優梅雨に隠れけり

梅雨雀フェンスを上り下りしをり

かたばみの花の淋しきかぎりかな

ちっぽけな青柿にしてお恥ずかし

あやかしを畏み畏み海開

濤音に犬の追はるる海開

知らぬ間にあらあら薔薇のうどん粉病

屋上の風を肴にビール酌む

立葵歩いて直す病あり

白木槿母に忘らる日が来るか

雨一日金魚が浮いて死にさうに

撒く餌に金魚なついて来たりけり

すててこの上よりあはてゝ履けるもの

とある日の梅雨の合間のコップ拭き

すててこの膝のところが薄くなり

すててこのまゝ玄関に出やうかとも

梅雨の本ブックエンドに挟まれて

金魚習性餌を貰ひ一礼後ずさり

蕎麦ボーロおやおやこれは梅雨湿り  
突っ込んでいやはや蜘蛛のねばる糸  
蜘蛛の困の幾つもあるば破り甲斐  
晴れ間縫ひ薔薇に噴霧器鳴らしをり  
藪からし怪しき光り放ちけり  
軒風鈴風のいふことかぬなり  
強く吹く風に乗り換え碧揚羽  
簡単に生きる金魚を見本とす  
鉢の金魚一つ一つの無分別  
薔薇真つ赤チラシ一切おことわり  
蔵王山麓・酪農センター見てアイスクリームてんこ盛り  
遠刈田郵便局に入る燕  
霧蔵王・お釜の中バスはもたもた蔵王嶺へ  
霧の中ガイドお釜がある筈と  
足許の白山千鳥の他は霧  
白靴の一団お釜を覗き見に  
念力で霽れるお釜の霧でなし  
霧濡れのお釜の石に御注意を  
山小屋はヴオイラー焚いて昨日まで  
飛瀑音筋といふ筋伸ばしけり  
草刈蔵王温泉って蔵王縦断道路脇  
湯を蔵王温泉うすめうすめ夜霧の共同湯  
ミズコブ\*ミズコブはミズの実の突きだしビールうまかりき  
霧の夜の湯町の上湯下湯かな  
朝湯して湯花は霧の淡さなる  
露天湯の湯口の硫黄霧呼べり  
戻り湯の湯町坂がち霧にほふ  
夜も更けて霧に灯ながす老舗宿  
濃霧の夜壁越しにこゑ共同湯  
ガタの来し下駄箱霧の共同湯

土産物屋をひやかし霧冷え宿浴衣  
シャツ通す冷氣朝霧湧き止まず  
朝霧の樹間ほのぼの明るめり  
蜘蛛の囿に朝霧の粒あからさま  
庭園灯さ霧の他に訪ふものなし  
霧退くと思へば寄せて白樺に  
朝霧に散歩の下駄の緒の緩し  
高原<sup>坊平</sup>ゴルフコース敷地のヤナギラン  
うまごやしスキーヒュッテを取り囲み  
エンジンブレーキ響かせ下りる夏蔵王  
さくらんぼ狩のツアーのごいっとうさん  
さくらんぼ狩の観光バス横付け  
さくらんぼ狩をある日の天童晴れ  
試食してピンからキリのさくらんぼ  
さくらんぼ天近きほど甘きとぞ  
さくらんぼ熟れし証しの一光点  
夏帽<sup>山寺</sup>の囿む山寺案内図  
菩提樹の実ほとりより発つお山入り  
沙羅咲いて且つ散る根本中堂前  
万緑に磐を配す立石寺  
ころり往生阿弥陀を拝す夏衣  
杉皮の赤むきだしに夏の山  
額に汗お山詣での首手拭い  
十葉の見目うるはしき立石寺  
蝉の尿ならぬお山の通り雨  
赤紫蘇にお山詣での汗拭ふ  
掛けごゑを専らに登る青葉山  
玉の汗五大堂にて一休止  
五大堂風あり扇子納めけり  
磴巖し十葉の辺に弱音吐く

汗止まぬ上り弱音はあきらめに  
仁王門汗し過ぎれば膝笑ふ  
磴攀ずる蟻の一步を重ねつゝ  
丈六佛涼しみ拝む御居処かな  
かにかくに玉の汗かく千余段  
梅雨どきの湾岸道路灯の連鎖  
狩衣瀬戸神社 夏越の祓に風はらませて大祓  
祝詞の間蟻を見つむる大祓  
神主の出を待つ木履大祓  
むにやむにやにむにやむにや和せる大祓  
蚊とんぼのやうな神主大祓  
草原の端っこ押え捕虫網  
文字摺草団地の芝に交り咲く  
洗濯物畳まれてはと蟻逃ぐる  
取り込まる洗濯物に子かまきり  
捕虫網押えたままで大きな声  
熊蟬の大捕物となりにけり  
ゴキブリ駆除家の隙間といふ隙間  
藪っ蚊の敵機来襲眼を凝らす  
ゴキブリ駆除硼酸だんごをへエとみる  
よそゆきの水玉模様天道虫  
冬瓜の煮方煮崩れ防止策  
吝ん坊のごとく冬瓜煮てとろ火  
冬瓜の銀あん下処理とは何ぞ  
晩酌の松魚にちよんと擦り生姜  
口中に飛ばす枝豆いい感じ  
土左衛門欲しがる海の開  
土左衛門盆波に乗り材木座  
ノースリーブ横須賀をゆく独立祭  
洗濯屋蒸気しゅっしゅっと独立祭

軍艦に四万六千日の波

街ぼこりさらりとながし烏龍ハイ

コカコーラにおくび連発独立祭

生まれくる子のごとに尽く願の糸

突堤に舟虫しゃしゃり出て祭

石齧る音も混じれり草刈機

祭の中しゃくりつゝ泣く女の子

砂の城築金沢八景 乙 鱸海岸きし王子潮浴びに

浮輪の子くらげの拾いごっこして

はしゃぐこと尻をぷりぷり浮輪の子

職退きて今夏で三年竜のひげ

楊梅の朱ヶ夏落葉方円に

大方は妻の筆跡願の糸

「金魚さんご飯ですよ」と餌やる孫

のうぜんの散りやうさしづめ振袖火事

料亭ののうぜん下火となりにけり

コンビニに盆供のセット出廻りぬ

釣具店祭提灯戦がせて

朝の入江ええ恰好して鯿飛べり

線香花火じゅじゅじゅじゅじゅと牡丹より

線香花火踊る小松葉大松葉

線香花火終の柳は公家のひげ

あらあら黴下駄箱の靴搔い出して

黒揚羽おっとこちらの道でなし

朝顔の花に従ひ葉もくたり

節電や掠れて鳴れる軒風鈴

鼠尾草みそはぎも売られスーパ―花売場

居間塞ぐ裸寝妻に咎められ

夏萩のはらほろひれと葉の靡き

風鈴の引き込む風の裡にをり

夏の夕虫の語らふ繁々夜話  
百日草今どきこんな花咲かせ  
かはほりの妙な飛び方卍飛び  
かはほりやかなかなか暮れぬ墓地のそら  
近道は墓地の脇道盆踊  
彩と云ひけふの朝顔奥床し  
しどろもどろに鳴く蝉ありて雨の中  
煮え切らぬ鳴き方あれはにいにい蝉  
ふくらはぎ蟻に登られこそばゆき  
雷が西瓜に入れし縞模様  
蝉捕りを中断塾に出かける子  
石鹼玉飛ばす子追ひかけ壊せる子  
ゆすり蚊の気炎拳げをり祭まへ  
砂浴びの社の雀祭前  
夜店の材鉄パイプなど持ち込まれ  
水舎から水借り夜店支度とよ  
裸電球柱に巡らせ夏祭  
コンビニのとつつきで売る盆のもの  
金魚屋の親爺かたへに蚊遣香  
金魚屋の親爺と金魚の共喰談  
金魚の糞掬ひて待てる店開き  
金魚掬ひおたまじゃくしも入り交り  
掬はるゝ金魚は隅にかたまりて  
よその子が気になる祭浴衣かな  
楊梅の街路樹中華街近し  
氷菓買えと孫の奥の手泣威し  
首振の一芸をもつ扇風機  
長生きをし行きずりの御婦人さう風蘭見て曰く  
風蘭を見上ぐる人のうしろに佇つ  
風蘭はそらそらあそこ木瘤の下

風蘭を見て来し夕べ雲呑食ぶ<sup>わんたん</sup>  
神輿昇道路端にて腹ごしらえ  
立話山車の引き手の減りしこと  
山車を曳く中に友ゐて木遣誦す  
蜻蛉捕パパお手本の忍び足  
虫籠を覗けば何と瑠璃蜥蜴  
朝顔の一時に咲き勿体なし  
サルビヤやいつになったら雨あがる  
へくそかづら凡打ばかりの草野球  
珊瑚樹の実を過ぐころうらぶれて  
珊瑚樹の実やご本尊修復中  
孫吾をあふぐ団扇のへなへな風  
連れ立ちて物の流るゝ夕立川  
夕立に足止喰いぬバーガー店  
朝顔の明日期す蓄五つほど  
家中に玩具踏み場もなき炎昼  
峯雲<sup>孫美雨</sup>の漲れる日を産見舞  
笑み涼し何を夢見て赤ん坊  
祭済み元の冥さの八幡宮  
わらわらと乾きて蟹の砂だんご  
石鹼玉吹ける側から壊されぬ  
同慶の至りの冷酒注ぎ合へり  
寢言云ふ孫預かって明易し  
梅雨最中とんだ菓の副作用  
鼻先に「夏だ！旅だ！」の車中ビラ  
夏キヤベツ盛り沢山に勝烈庵  
ビヤガーデン雨の匂ひの木椅子引く  
灼くる道ほじくり返しその上に  
掬ひたる出目金の黒抽んでぬ  
髪洗ふボトル二つやさてどちら

波に乗り余世は海月の風来坊  
遣りつけぬ仕事たたりて三尺寝  
新参の金魚が鉢を一巡り  
御旅所の氷の下の烏龍茶  
日雷孫のご機嫌斜めなり  
充分に引きつけ置いて蚊を叩く  
生りものの容歪みて梅雨の果  
蚊の奴めまだまだよそれと撲つ  
脚つまみ白紙の上へ蚊の骸  
ふうせんかづら唯見てゐてはつまらない  
虫籠に蝉の御報謝ありにけり  
破裂して石鹼しやぼんのしぶき岩つ角  
夏草の穂先くるくる回す風  
朝顔のけふ咲き惜しみ一つだけ  
朝顔の花能く見んと中踏み  
天灼けぬ白さるすべり地に灼けぬ  
空模様怪しくなれば白粉花しよげ悄気  
虫籠提げ蝉など捕ってちようだいと  
嬰の寝巻ピエロの水玉模様の夏  
葛の毳こころで道の尽きをるよ  
鉢植えにして朝顔の鼎咲  
夏蝶の眩しき野合見てゐたる  
朝鮮唐棉たんたん狸のふぐりぞな  
あめんぼの親玉カヌー漣をすべる  
ぎこちなく曲りバツタの飛翔線  
日盛りの波倒れんとする際の照り  
老人の我流体操カンナの辺  
夏曉の散歩の顔の血色よき  
かなぶんを捕って抛りて戸をびしゃり  
灯取虫黙らせんため灯を消しに

二階に赤子階下にかなぶん喚く家  
潜みゐし昨夜のかなぶん灯を取りに  
赤ん坊の欠伸おしゃぶりママ昼寝  
峯雲より滑走ジェットコースター  
蟹さんの型押し遊び灼け砂に  
海を見て浮輪ふうふう膨らます  
はまなすの花と実の数実が勝ちて  
断り無く入り来し蚊なれば平手打  
で孫で虫の角さえさはれぬめ女の子にて  
庭中のでで虫蒐め一つ木に  
角つつき子はでで虫の調教師  
近頃の蚊いぶし随分いい香り  
小柴産地鱈の干物血筋透く  
竿の上滑り易くて蝸牛  
蝸牛妙な明るさ遺しけり  
でで虫の引っかかる殻さてどうする  
人の吐く炭酸ガスを求めて蚊  
掩えんたい体に蝙蝠えんたい巣くふ終戦日  
大夕立煙草ふかしてやり過ごす  
採血の血止する間の百日紅  
夕立あと町空響き易きかな  
火取虫こんど飛んだら百年目  
炎昼の玩具転がしある一間  
お願いを連発する子夜店の前  
ビール酌む腹のくびれに眼を落とす  
葛饅頭お産に一人目二人目あり  
振り塩の穴の目詰り梅雨長引く  
捕虫網戻りはママがうち担ぎ  
潮浴びの手の萎びをり焼むすび  
捕虫網破れかぶれに振る始末

向日葵の謹厳実直背を正し  
蚊を撲つに眼を宙に漂よはせ  
だんご虫節々返す薄暑光  
けふ暑くなること確か斑鯉まだら  
赤ん坊に敷布妙なる天の川  
碧天へいきなり到達雲の峯  
白芙蓉鎮まらぬもの鎮めをり  
夾竹桃一難去ってまた一難  
炎天下三半規管に従ひて  
羽蟻また紙に包んで捨てにゆく  
置ある限り羽蟻はそこへ落つ  
蚊の止まる耳搏ち据えて耳が莫迦  
とりあへずこちちの方へ炎天下  
夏休テレビひねればドキンちゃん  
焼茄子にまづまづ食のすすむなり  
茄子を焼く熱気厨に籠りたる  
仏壇より借りくる文月のチャッカマン  
妻用意の昼餉小さな蠅張に  
アイスティーぐびぐび飲んでまた寝る子  
糸屑が絡まってゐるすべりひゆ  
首根っこ打てる花火の大筈  
横須賀のサンダル履きの開国祭  
一夜にして自転車捉ふ蜘蛛の糸  
空蟬の興はや失せて掌に残る  
空蟬とFON机上に昼闌けぬ  
空蟬を机上に置いて散歩果つ  
空蟬のやがて忘らる机の上  
空蟬も蟬も入れられ一つ籠  
空蟬の爪先少し焦げてをり  
腑分け図のごとく詳しく空蟬描く

空蝉のかけらも入るらむ長寿薬  
みんみに云ひ負かされてをるごとし  
捕虫網継ぎ足す棒が見あたらす  
僕捕りし蝉見て呉れと眸めの云へる  
ここに来て蝉鳴くほんの二三日前  
蝉を捕る極意暫く鳴かせてから  
風鈴を鉦と聞く日のありにけり  
南部鉄風鈴その名に羞じぬ音を  
この暑さ躰がついてゆけぬといふ  
浜木綿のざんばら髪は幡随院  
ほぼ鉢の真ん中金魚の平常心  
ひっぱたかれ潰されし蚊を払ひ退け  
祭の夜半ベソかいて蹤きゆく子  
夏掛を挙げ句の果てにぐるぐる巻  
一夜経て悄然からすうりの花  
古簾取り替えやうかこの辺で  
滴れり三葉虫の昔より  
羅の二人は佳けれ納涼図  
短夜を寝ねんとするに肋に手  
症状もとの因もとの知れたる涼しさよ  
一切を天に預くる涼しさよ  
日々のこと天に任する涼しさよ  
線香花火一本頒けてもらひけり  
棗の実エホバのこしらえたりしもの  
山林に蝉の蛩声おとろえず  
鍛えたる角いつ使ふ甲虫  
河童忌の肋撫づれば風の起つ  
夏瘦は風体のみに非らざるよ  
尻腐れ座りづめなる布袋草  
鰻の香ながす鰻松あな憎し

鰻松に入り来鰻のやうな客  
ル―ペもて紙魚の齒なんぞ見てみたし  
古漬に顔を顰める土用かな  
羊羹が何故か効きさう夏バテに  
かうなれば蝉の穢滅計りたし  
空蝉の鋼の脚のとしなへ  
空蝉の宝庫と巡る八幡宮  
虫籠の棧に摺まり弱りをる  
なまくらな鋏を使ふ大暑かな  
アッパーカット啖らひしごとき真炎天  
分銅の飛び来るとく黄金虫  
スペースはづらして作る冷蔵庫  
大山の水が命の冷奴  
窓に人ちよんと描きて芭蕉林  
夕顔の大首役者めく花よ  
桔梗の蕾祈禱の調度に似る  
木鋏に木渋かたまる土用かな  
パリパリ感好きでレタスとフランスパン  
口はさむ余地なき蝉の天下なり  
野次馬のやうに馳せゆく蝉見たり  
蝉音沁む洗濯ものを取り込み  
車前草に埋もれて道は在るには在る  
かるめ焼おたまの上の銀河系  
陶工の筋金入りやきりぎりす  
螳螂の美学を学びジャコメティ  
螳螂の斧見よ一点豪華主義  
質蔵に月高まりぬ寺前町  
蚊柱の柱のづれを立て直す  
肅と蝉発たする天下一の鐘  
蜻蛉がお手本人力飛行なる

蜻蛉の好みて止まるダンボール  
朝曇黄のうちかすむ女郎花  
黄は艶なり長けては灼くる女郎花  
くさぐさの団扇の中のお気に入り  
胡瓜皆すんなり基準値合格品  
冷蔵庫妻に西瓜入れあるぞと出掛け  
額艶やかに蠶螂の妙好人  
鶏頭の随筆何とかまとまりぬ  
落とすものあと命だけ秋の蝉  
水飯みずめしの彼の日々母の語り草  
もう一つ鳴く蝉殖えてまったくもう  
サンダルを履き違へ来し甚平着  
タオル一枚はおる裸やバツ悪し  
綿飴孫買へと伝家の宝刀泣きを入れ  
台風の眼の中にゐて蝉憶せず  
葛蔓の何を仕出かすこの勢ひ  
一連隊大人に伍して炭坑節  
踊の輪間合の空けばそこ詰めて  
ここまでは子供の時間盆踊  
昼寢覚我翩翩とひるがへり  
自転車を漕いで灯点す夜の秋  
啼く蝉の後先もなく一緒くた  
残照の退く中鯨でも見にゆかん  
蝉ごゑを薄め薄めて夕風吹く  
虫の夜をピアノ小刻みダリエンソ  
バンドネオンは虫の息継ぎダリエンソ  
夏夜刻むリズムの権化ダリエンソ  
墓地越えて風の運べる踊唄  
夕風にすちやらちやんちやか盆踊り  
晩蝉のきのふともなく音を絶てり

ざら紙に蟬の一句を書留めん  
精一杯立ってゐるなり秋海棠  
台風の巻き添え喰って鳴く蟬か  
古簾一枚吊りて籠城す  
真炎天雀憶せず足許へ  
夏の夜のうしろに廻る灯影かな  
つらさうな顔して通る西日中  
一切を放置してをり西日中  
痛恨の極みの峯雲突っ立てり  
蚊遣香背中の方が手薄なり  
蚊遣豚おもしろおかしくこの後<sup>のち</sup>も  
踏み外すことが愉快でひきがへる  
八月の負ふてゐるもの何々ぞ  
古団扇きゅつきゅと骨が鳴るやうに  
うるさかり先生口調もかなぶんも  
七節蟲の単なる棒があるき出す  
関節を秋海棠も持ってをり  
もう先が無いぞ無いぞと蟬しぐれ  
かなぶんの打身の音をひたと聞く  
蚊の刺せる辺りぷっくり搔き壊す  
閻魔庁正門脇の百日紅  
風鈴の空打ときに見せにけり  
うつくしゅうみえる家々野分晴れ  
電線のつくづくとある野分あと  
台風を生める地球と金魚玉  
金魚玉如何に台風荒れやうと  
蟬手づまりそんな感じのする夕べ  
野分あと長々起きてゐたりしよ  
濡縁で聞きぬ夜蟬の腹話術  
仙厓の布袋図さながら夕涼み

夕月の一刻経ってその高み  
武士ものふの風貌なるも蝉非力  
野分あと斯く減る蝉音拍子抜け  
放浪の木を替え蝉の山頭火  
朝蝉の寝言まがひのこゑ一つ  
手探りでさがす夏掛あらぬ方  
燃えさしの無きやう芋殻焚き了えぬ  
芋殻焚く頃ぞとひねる新聞紙  
鳴くまでの手順を踏みて法師蝉  
野外映画鞍馬天狗のをぢさん出づ  
骨傷みしても現役古扇子  
水着より潮したたらせバーベキュー  
木に縋る蝉のまたもやドジを踏む  
お花畑リフト二つを乗り継いで  
右左だう廻ろうかお花畑  
雲海をとよもし航けるエンジン音  
夜の蝉も十七文字も紋切り型  
かなぶんに飛ばれ驚く夜の寝所  
捕虫網産土の森一漁り  
見当をつけずに飛べる正に蝉  
氷河つるつる尻餅ついたら百年目  
かへり見るときには滝の威厳失せ  
不動滝名前負けして落ちにけり  
滝不動苔むすなまくら剣かな  
まとまりのつかぬ滝水とはなれり  
滝壺へ瀬を替え道の続きをり  
滝しづき女はキャーと云ったきり  
大西日覚悟のほどは出来てゐる  
蝸牛そこで迷うて何とする  
空蝉の背に刻めるは梵字とも

ごきぶりを打馴れてゐて打洩らす  
打つ前のまだら縞蚊の凄味かな  
先急ぎ西日をさまる当てもなし  
変調は杞憂で済みし涼しさよ  
台風の素通りてふはなかりけり  
自転車で駅まで運ぶ帰省の荷  
ご先祖生身魂に遇ふ面持ちであらせられ  
子蟻螂かまって斧を向けらるる  
汗のものともかくここに置き申す  
盆の挨拶妻がおもむく西林寺  
盆近み蝉音そろそろ空いて来し  
蝉の音の納まるを待ち門火焚  
庭先の何にしやうか盆の供花  
魂棚の賑やかしとて葉鶏頭  
剪りて来し盆花にまだ日の温み  
飲食の腹足りてさて門火焚  
茄子の他仏は水を糧とせり  
きのふけふ仏がそこに居る端居  
タイル張り魚屋の売る地のたかべ  
盛る夏妻は地力をつけつつあり  
喰いちぎる盆の蒟蒻お熱し  
芋殻火に降り出す雨のすまなささう  
吾知らぬところで蝉のぽっくり死じに  
たたみ込む暑や死神に手を貸して  
人はローン蝸牛は殻を負ひ晩夏  
酸橘得しされど秋刀魚は旬ならず  
夜の秋赤鉛筆が見当たらず  
揚菓子の拍子抜けして秋湿り  
浜木綿はタカラジェンヌの長まつげ  
朝顔は花より種子に精出して

墓栃木田沼参とて葛生に近き片田舎

雨の日の今日の句材は金魚鉢

ピースからホープに替えて終戦日

マツカサー銜えパイプの終戦日

終戦日目当てに組まるドキュメンタリー

先頃の案山子の装なびのモダンなる

田沢湖は青嶺の間に手の窪ほど

黄花孫六温泉のそれコウゾリナとか云ふ草か

混浴の洗ひ場奔る青蜥蜴

山間を雲ゆく晩夏の孫六湯

孫六湯山の蜻蛉は岩場好き

山道の腐れ木株に木の葉蝶

混浴の慈母観音に目の遣り場

堰とどろ山に秋くること早き

湯治宿つと山清水引き込んで

捨てゝある湯宿の蚊遣灰白し

紅すすきほどにあからみ山の湯に

混浴の五人に秋日あけすけに

混浴のアダムがイヴに蜂指さし

混浴の脱衣場秋津の入り来たる

混浴の蜂の来る湯に今一度

混浴の真上の大き茂みかな

孫六湯前夏川の展けたり

混浴の女岩踏む跣の音

混浴の飄ひょうと上ひょうがれる赤裸

蝉黒湯温泉しぐれブナすらすらと生ふる森

真清水に蕨の塩抜き湯治宿

がまづみの色づく頃の山の湯に

混浴は熱め折々秋津くる

混浴のずばり入る湯に秋津来る

鍵の字に湯治棟あり初すすき  
足湯大釜温泉して簀の子に止まる秋津見る  
駅長大曲の粋な計らひ花氷  
帰るさの横手の花火蔵の間  
稻小安峽温泉不作うったふ婆の冷夏の眼  
きりぎりす灯を取り損ね露天湯に  
蟻川原毛地獄朽を黙々のぼり黙々下る  
黒揚羽おどろに川原毛地獄越ゆ  
側溝泥湯温泉に蛇の亡骸うち捨てられ  
夏鳥ちようかい海山はるばる来たる者にこそ  
鳥海山の夕栄ながく送り盆  
鳴く虫西馬音内(にしもない)も鉦のやうなり西馬音内  
皆浮かれ戯け地口の踊唄  
皆踊る笛に鉦っこハギ衣裳  
嬢じよっこ達めかして西馬音内にしもね盆踊り  
踊る夜を嬢っこ真紅のしごき帯  
彦三頭巾キタカサツサと踊りけり  
彦三頭巾白鉢巻が夜涼呼ぶ  
一踊りおじやれ篝火盛る間を  
盆踊り爆笑もののエロ音頭  
櫓の上囃子地口のいかがはし  
よう踊れ西馬音内にしもね女ごのハギ衣裳  
嬢じよっこ等の踊り浴衣を見てたんせ  
盆踊りホームステイはお寺にも  
踊り見に二万石橋うち渡り  
盆踊り甚句ことば詞は野趣あふれ  
亡者踊り鼓、すりかね鉦打鳴らし  
晚涼の橋の向うの寄せ太鼓  
亡者踊り夜半の篝火掻き立てて  
撒き砂を踏みしめ亡者踊かな

撒き砂に願化踊りの雁形舞  
彼の世にも搏ちて願化の鉦鼓  
西馬音内夜更けて踊り達者が出  
願化踊り篝の薪目減りして  
夜も更けて彦三頭巾の虚仮踊り  
見物衆踊る腰つき見てたんせ  
優に六尺彦三頭巾の踊るかな  
篝の前ここぞと亡者踊かな  
豊年踊り地口も嬢腹満作と  
踊果つ町筋篝なほ染めて  
帰るさに編笠抱え踊人  
踊り見て宿は雑魚寝の公民館  
羽後牛のステーキ青嶺滴るに  
またたび朝市の青実おまけの一掴み  
朝市にミズの瘤買ふ旅の者  
朝市の足下目遣れば篝茸  
丸茄子朝露弾く梵天丸  
水茄子の笹売り朝市たて込めり  
夏川ほつと湯田 湯本温泉のこころが熊の通り道  
紅笹峠 蛸や夕日の里は見えながら 子規すすき湯田の町並見えながら  
子規ここを下りゆきしか鶉花  
秋あかね和賀流の句碑の肩選み  
きりぎりす奥羽山系横たはり  
湯田人の朋もてなしの鰻揚げ  
平皿に呆と口開け揚げ鰻  
ミズ涼し辛子のからみ具合よし  
湯けむり上げ和賀流の里のたうもろこし  
和賀川の鮎瘦せ瀬につく頃ならむ  
べこ虻は炭酸ガス好き車中にある  
晚涼の胸に砂寄せ砂ゆっこ

汗だくのおでこ拭はれ砂ゆっこ  
額に汗尻に火がつき砂ゆっこ  
またたび酒漬けゐて羽後の旅名残  
風通る所に身を置く夜の秋  
歳時記の表紙藍鉄夜の秋  
落蟬のまた此処にももの思ひかな  
落蟬をヘッドライトのよぎり消ゆ  
方寸の景見て死ぬる蟬ならむ  
蟬を捕る子のためにあり八幡さま  
捕虫網蟬を大地に押さえ付け  
頭を寄す子ら一人が蟬を押さえ付け  
手すさび妻に処暑のコップを拭き並べ  
声戯れに大阪弁つくりままごとあそび蟻さんと  
ばらばらに鳴いてけつかる処暑の蟬  
芙蓉咲くや一方的なあかるさに  
いま正に蟬の天下といふべかり  
茄子汁にすこし早めの夕餉とる  
混濁の一日なりしなすび汁  
茄子汁の味噌の香残暑の香なりけり  
佳き風の四通八達夜の秋  
夏惜しむ豆腐とうぼんじやんに絡め豆板醬  
あけっ妻の名は陽子 横浜生れひろげの港のヨーコ ヨコハマ 夏  
ことさらにことしの残暑手強こわかり  
おのづから秋となりぬる爪楊枝  
ピザ食うて残暑なんぞにへこたれじ  
ぎらぎらと日差すなかにも秋意かな  
高低を選ばず止まる蟬となんぬ  
墓見とがめられてはもぐり込む  
夕蟬の一段落や飯にせん  
玄関の灯の及びる玉すだれ

落蟬は有為の奥山けふ越えて  
棲みつける墓ものそりと門涼み  
病院は軍艦に似て終戦日  
ぽんぽんとけふの花火の予告あり  
逆さまのぺこちゃん花火失笑買ふ  
花火にも音の味付ありにけり  
旅に出て居る間に雀蛤に  
蛤になれざる雀の影あそび  
眼をこすりつゝ来て芙蓉の咲くほとり  
その声価大いに疑問麦こがし  
暇あればすぐ横になり古団扇  
大夕焼そのところは割り切つて  
口中の西瓜の種を何處へやる  
冷氣にも氣迷ひのありお化け小屋  
山峡の稲をいぢめに山背風くる  
アルミ銭つまみ退けおく夏の果  
処暑のそら土器かわらけいろの火星現る  
第二子もおなごと聞けり鳳仙花  
萍の仕掛成程斯うなのか  
ツッキ―ニ実結ぶ蝶の肝煎りで  
駆け足で雨くるアキノエノコログサ  
落蟬の一つは玄関灯真下  
落蟬の足蹴にされて一、二転  
指圧教室海馬のごときを稽古台  
指圧教室夏バテの筋搦まれて  
秋興の経穴ツボの名くさぐさ人体図  
竜淵肩のツボに潜む肩井ケンセイ指圧して  
路地をゆく登音つぶさに夜の秋  
湯治場の山深ければ葛の花  
蟬止まる所に拘る太郎杉

豆腐一丁あれば御の字冷やし酒  
夏満月妻のうながす処に佇ち  
葛あらし葛の横腹見せにけり  
焼酎は薩摩で飲んであれ以来  
火星大接近妙なる夕顔に  
茄子汁や妻のきりもり四十年  
アロハシャツ色地味にして柄派手や  
何にでも被せるラップ西瓜にも  
寄りかかる妻ゐてなにかと助かる夏  
醤油瓶昔磨けりブラシの花  
晩夏はや煮詰め過ぎたる豆腐汁  
熊蟬が朝から納豆粘り出す  
殻負へる蝸牛より倅せに  
泡盛に時間稼ぎをしてゐたる  
金魚の死母には伏して言はずにおく  
めうが採る数の目当ては特になく  
蠅虎即暁斎のかみつき貌  
玉すだれ裸叩いてゐる男  
端居してみな遠のけるものばかり  
萍の水栽培を厨にて  
気づかひの梅干茶漬忝なし  
夏萩や地べたを伝ひ風起てり  
訃報聞く梨の皮剥く音の中  
数珠玉を採りて化仏の薬壺にせむ  
油蟬一列縦隊なせる幹  
会葬父郷 葬送の人に躓きゆくしじみ蝶  
書家にして露の世あとにせられけり  
天が下灼けゐる墓誌に余白あり  
これはこれは喪服にぶつかる稲子磨  
古里のはたはたみんな祖おやの貌

はらからと喪服を灼かる炎天下  
こんなにも灼けゐる墓石西林寺  
墓地の草しみじみ引きてをりひとり  
扇風機悼みの風を送るなり  
夏葎人を葬ることに馴れ  
秋海棠思ひ至るは相田サク  
懐かしくサクがゐるなり夏座敷  
島田家の溝萩常のいろ湛え  
葬りて西日切り裂く中にをり  
骨壺に葛生の青嶺見せ戻る  
骨壺は溝萩盛る家を出で  
出流観音満願寺 蝉しぐれ寄進杉苗拾萬本  
出流山いずるさん一足早く水の秋  
沢沿ひにのぼり満山秋海棠  
ががんぼのぶらさがりをり滝不動  
滝水のとどろに大徳出づる寺  
赤紫蘇星野遺跡畑縄文人の棲みし丘  
この丘の木の実が主食縄文人  
名にし負ふ石の大谷の蝉しぐれ  
大谷石佛秋寂ぶ唇に紅さして  
秋そこに横臥屈葬人骨に  
ず上野周辺ぼらな吾東京に出て二科を観る  
遠くを見るゴリラに園の晩夏かな  
秋づくと上野の山を歩きけり  
偉丈夫東照宮 松崎鉄之介句碑な鉄之介句碑蟻攀ずる  
上野山精養軒の蝉しぐれ  
蓮見たくなりて上野の池之端  
くさぐさの碑の中スッポン感謝之塔  
紅蓮上野の山の負け戦  
蓮の実の青き実弾抜きて見す

こなたよりあなたへ渡る蓮の風  
岩崎邸百合も進取の香り立ち  
岩崎邸木斛の実のあかがね色  
建前の柱に蝉も招ばれけり  
検針のこんどは瓦斯や日の盛り  
亭々と晩夏を送るホルトの木  
かなかなのあと艶消しの油蝉  
歩くなら坂本あたり法師蝉  
啼く蝉のただならぬ時過ぎゐたり  
その羽音てつきり蝉と思ひけり  
百日紅皮の剥落続きをり  
栗おこわ持って実家へ妻いそいそ  
云ふならば初老夫婦の夕涼み  
実習の指圧のいろはもみぢの手  
なまり節喉につかえて万事休す  
新涼の柳手といふ指圧法  
夏痩せて妻の指圧の稽古台  
茹で栗の当りばかりと言う訳には  
寝酒などもともとやらぬ夜の秋  
鴨焼のわが家の味は極甘め  
夏葎掃出窓の高さほど  
おっとりとして過ごしてゐては羽抜鳥  
草の名はそこそこ虫の名はぜんぜん  
茗荷汁気兼ねなき友いつか減り  
目もさやに秋は来にけり牛蒡の葉  
萩と露色のつり合ひとれてをり  
地に降りて人に動じぬ秋の鳶  
前山に残暑色濃くのこりけり  
少しづゝ山は色づく榎の実  
山萩の地味でゐて且つ和むいろ

女郎蜘蛛朝は黄金に張れる糸  
蜘蛛の囿もあさみどり帯ぶ芦の間に  
幾何学を篤と学びし蜘蛛ならむ  
鉛筆でむかご落として一つとや  
車前草の穂の逞しく夏送る  
鬼やんま棲みつく山に露降りて  
なまる身にすっかりせよと氷水  
閼伽桶の水鳴る一人の墓参かな  
線香の付け火に手を焼く墓参かな  
墓洗ふ向う滴る唐沢山  
蓮田に潜む少年ぎんやんま  
少しづゝ暁の色貰ひ榎の実  
秋草と一つ括りに野辺の草  
秋草を厨廁に頒ち活け  
青花を摘むとき露が手に当り  
顔にくる今朝のあつさや会葬日  
活け込みて卓上秋の野辺とせり  
トカトンと秋も始めの家造り  
草叢をごそつかせゐしは蟋蟀  
指圧爽やか突手柳手拍打叩打  
雷夕立関東大気不安定  
胡桃割る小部屋のなかに控の間  
鴟の昼絵本のつづきせがまれて  
鶺鴒とただちに判る翔び方よ  
燈火親し袖珍文庫二色刷り  
秋の灯に詰め替えてゐる旅靴